

第57回 中高校生の吃音のつどい(演劇レッスン)

11月4日(日)、小学生10人、中学生7人、高校生6人、ご両親19人、スタッフ31人の計73名が参加。池袋小学校ことばの教室及び体育館にて開催。午前は「英国王のスピーチ」の演劇版に取り組み、午後はどもることについての話し合い。初め劇をやりたいくなかった子供も結局楽しそうにやってくれましたし、参加者の口から「スタッフの白熱した演技に感動」という言葉が出たのは初めてじゃないでしょうか(違ったら教えてください)。スワニー川が音痴だったのかどうかは自分では分からないんですけど。私自身の記憶をたどると、私は3年前(高校3年)に演劇のつどいに初参加した際、演劇を全然嫌だとは思いませんでした。むしろ、自己開示ができる、普段と違う自分が演じられることに喜びを感じていた記憶があります。今回、あえて苦手なことに挑戦した参加者の方々が、声を出すことと表現することの楽しさを覚えて帰って頂ければと思っています。最後に、「故郷の人々」「草競馬」「美しき青きドナウ」「威風堂々」を伴奏して下さいYさん(マリンバ&ピアノ)、コーラスして下さったお母様方にも感謝したいと思います。

(リーダー;菅原慧、中西智也、川口亮太)

T. S君(中3)

中高校生の吃音のつどいの皆さんへ

11月4日(日)は、本当にありがとうございました。正直、最初は劇をするってことで行きたくありませんでした。けど行ってみたら、劇をしている人もどもりで、どもりがあるのにすごいなーと思いました。自分は劇を上手にできませんでした。でも、スタッフの人たちがフォローしてくれてなんとか出来ました。

話し合いでは、みんな僕と同じでした。その時一人じゃないと思いました。みんなから勇気を貰ったと思います。次の3月17日(日)もぜひ行きたいです。本当、スタッフの人達と参加者のみんなには、感謝しています。

これから先、どもりで学校に行きたくないこともあると思います。けどその時は、みんなのことを思い出して、3月17日(日)に会えると思うと心強いです。絶対、忘れません。

N. Iさん(小6男子のお母さん)

劇を途中から見たのですが、音楽や演出がとても本格的なのに驚いたのと、皆さんが一生懸命大きな声を出そうと、頑張っている姿に、感動しました。

自分も大きな声を出せるんだ、やればできるんだという体験を、息子にもさせたいと思っているので、また来年、劇をやるようであればぜひ参加させたいと思っています。

私自身、人前で自分の意見を言うのが苦手なので、息子には、吃音があるからという以前に、周りの目ばかり気にしないで、自分の意見をしっかりと話すことが出来る人になって欲しいと思っています。リーダーの方達が、自分の思いをしっかりと最後まで話す姿をみて、私も学ぶ事がたくさんありますし、息子にも、そうなってほしいと思います。

あと、先日は、吃音についての相談にも、たくさんのおついでにありがとうございました。中学へ入学する時に、学校の先生に渡すリーフレットや、中学生になる君へという本を、瀧田智子先生(文京区立金富小学校ことばの教室)に送っていただきました。これから先、親子共々いろいろと悩む事が多くなるとは思いますが、息子にとって、つどいが心の支えになってくれればいいなと思っています。今後共よろしくお願い致します。

こぐち 貴宏(スタッフ・中学生G担当)

演劇は未経験でしたが、これまでに演劇では吃らないという人の話を何度か耳にしていた、僕の場合

合はどうかか試してみたいという思いも少しあり、演劇をする事に対して、僕自身は肯定的でした。結果的に、僕は演劇でも吃る事が判明したのですが、それでも、吃音に悩むジョージ6世の役に、僕の吃音はぴったりではなかったのかなと、前向きに考える事ができました。

演劇後の吃音相談では、僕は中学生グループを担当し、彼らの悩みを聞いている間、僕も自分の中学生時代を振り返っていました。彼らにできるアドバイスとしては、スタッフ天野さんが言っていた通り「吃音だからといって殻に閉じこめるのではなく、積極的に学生時代を過ごした方がいい」この一点に尽きると思います。

ただ彼らは、終始吃音者と出会えなかった中学時代の僕とは違い、中学時代に既に吃音者と触れ合っているので、とても羨ましく思います。大学生になってから吃音者と触れ合うようになった僕ですら、得るものは大きいと感じているので、中学生からそれを続けていれば、吃音に対する意識もだいぶ変わってくるのだらうなと感じました。

根本 一輝(スタッフ・ご両親G担当)

(大正大学大学院 人間学研究科臨床心理学 M1)

演劇は私にとって5年ぶりとなる催しでしたので、とても楽しみにしていた反面、とても緊張していました。元々は高校時代に自分の趣味趣向や吃音改善など様々な意味合いを含めて始めたもので、志望が多かった周囲の風潮に半ば流される形で役者をする事になりました。その頃から特にセリフに対する不安があり、一時期白髪が生えるほどでした。今回参加した上で感じた緊張もまさにそれで、当時よりは吃音は楽になったものの、出だしで言にくい音があるかどうかを何気なくチェックする習慣は相変わらず残っており、練習で自分の中で今一な箇所があるとすぐに「本番は大丈夫だろうか」と考えることも変わりませんでした。

基本的には高校時代からの不安はそのままでしたが、その中で変化したところがあるとすれば、「自分は吃音を持っているのだから、本番中にどることもあり得るんだ」と素直に認められたと

ころだと思っています。以前は「とにかく流暢にしゃべろう」ということばかりが頭をぐるぐると回っていて、必死に吃音を持っていることを打ち消そうとしていました。なので、かえって先のことに対する不安が大きくなってしまい、とにかく劇のある日が早く過ぎればいいと考えるようになっていきました。今回はその先のことに対する不安があまり無くなり、上記のような不安が頭をもたげてきても、すぐに「どもったらどもった時にどうするかを考えよう」とある程度流せるようになってきました。この変化は、“どることを自然に受け止める”というつどいの雰囲気を経験してきたことも大きな要因だと思います。言い換えれば、「劇＝どもってはいけない、更にはどもったら何かに罰せられる(後半はかなり主観が入っています。何かというより一番罰しているのは自分自身だ」と思いますが・・・)という感覚が少しずつ柔らかくなり、吃音を隠すために漆喰のように塗り固める役のあり方から、吃音を持っているそのまの姿と併存した役のあり方を模索することを学んだというように言えるかもしれません。

また、演技することだけでなく、参加した子供達、保護者の方々と場を共有できたこともとても楽しく感じました。プログラムに含まれる舞台を経験すること、皆で歌を歌い合ったりすることなどの要素は、その場の誰もが参加できるという点でとても魅力的なものでした。特に舞台に立った子供達は皆(辛い部分もあったかもしれませんが)、頑張って自分に与えられた役をこなしていました。中には演技を工夫して、自分なりの要素を取り込もうと試みている子もいて、思わず「おおっ！」と声が出た場面もありました。その日のうちに役をもらい、練習することは大変だったかと思いますが、他の仲間と一緒に舞台に立って、その中で自分なりに精一杯表現しようと努めている姿は本当に素晴らしいと感じました。更に、参加された方々とスタッフの両方が目に見えない何かで感情を伝え合って、今しかできない演劇を作り上げていていったということは一つの感動として自分の中に残っています。なお、演劇には役者の他に、照明や音響、観客などが舞台を成り立たせる大事な柱として存在しているので、そういった役割も含めて、参加された方が自分に合った部門を経験してみても面白いのではないかと

と思いました。

まとめると、自分にとって今回のつどいは、自分の吃音に対するスタンスと役のあり方を考えられたこと、参加した方々と一緒に演劇という空間を共有できたことが何よりのことであつたと感じます。今後も演劇のようなチャレンジをする場では、参加した方々の間で様々な刺激を与え合うことが起こったり、チャレンジに絡んだ悩みが多く出たりすることが予想されますので、次回またスタッフで参加した際には、催しを楽しむということと、間に入って参加者の方々の話をお聴きするということを両立させていけるように頑張っていきたいと思います。

寺口 あかね (スタッフ・小学生G担当)

(国立リハビリテーションセンター学生 2 年)

演劇をやって、得たものは多かったのではないかと思います。今回参加させて頂いて、吃音についてというよりも、コトバについて考えることができたように思います。人が何かを伝える時にはやっぱりコトバが必要なのだと思います。人生を豊かにするものは、他愛もないおしゃべりや娯楽としての演劇、やはりコトバを媒介としたものなのだと私は信じています。

今回は小学生低学年グループの話し合いに参加し、Aくんを担当しました。誰かも感想に書いていましたが、演劇の際、Aくんは本当にのびのびと演技し、役に入りきっていました。「人前で発表したりするのは、好き？嫌い？」という質問にあれだけ不機嫌になっていたのに、演劇は、こちらが引き出したいことを簡単に引き出し、私に見せてくれたように思います。私が演劇に意味があると思ったのはここです。

子供にとって、自分が思っていることを言語化するという作業は大変なことです。そのことに対して自分が苦手意識を持っていれば尚更で、無理矢理話させようとすれば返って苦手意識を高めてしまいます。その表現の方法を、構造化してあげた形が演劇なのだと思います。
演劇だからこそ、想いを表現できたとい
う子供もいたかもしれません。



菅原 慧 (スタッフ・小学生G担当)

今回、一番楽しかったのが、演技指導でした！初参加のT. Kくん(小 4)とC. Yくん(小 5)を、櫻井君と一緒に演技指導しました。驚いたことは、嫌がる素振りがなく自分達の指示通り動いてくれた事に、関心しました。また、動作の振り付けも何点か教えたのですが、飲み込みも早かったです。本番もとても可愛く演技してくれたので、演技指導している側の私達もとても嬉しかったです。塾でアルバイトしていた時に、中学生に学習指導していて私の生徒がテストで良い点を取ってくれて、なぜかこちらも嬉しくなった時の感覚を思い出しました。

最後は舞台から帰ってきたCくん和ハイタッチして、終えました。その時、なぜか自分じゃないのに不思議な嬉しさがありました。本人は1箇所失敗したと言っていましたが、全く気になりませんでした。

うるしど こうすけ 漆戸 恒典 (スタッフ・ご両親G担当)

(国立リハビリテーションセンター学生 2 年)

今回参加させてもらって良かったと思うのは、まずスタッフの方と色々な話ができということです。おそろくつどいに来るまでは、吃音がある人に対して、吃音があるから特別な対応をしなくてはならないという意識があつたと思います。だけど、何回かミーティングに参加させていただいて、今回の演劇の練習だけでなく、出身とか趣味とかいろんな話をして、くだらない話をし一緒に笑い合ったりして、本当に楽しい時間を過ごしました。佐藤さんがおっしゃるように、吃音の人も、そうでない人も、**感じる事、考える事、さして変わりはありません**ということだと思うのですが、そういうことが実感できたということはとても良い経験だったと思います。

また演劇を通して、表現してそれを伝えることの難しさを知りました。どのように表現したら登場人物の思いをできる限り伝えられるかを考えて、それを周りの人が見ている前で体現するのは、難しいだけではなく、恥ずかしくもあり、気持ち良くもあり、複雑でしたが、自分にはこんな一面があるということを発見できたりもできたので、今はやって良かった

なという気持ちです。佐藤さんに演技指導してもらって、演技に少し目覚めました(笑)



北川 敬一 (スタッフ・ご両親G担当)

(DVD「ただ、そばにいる」映像作家)

映画『英国王のスピーチ』より、午前のスタッフの演劇版『英国王のスピーチ』、午後の参加者の演劇版『英国王のスピーチ』の方が、とても良かったです。理由は、皆が一応、演じているのですが、途中で演じているのかどうか分からない気分になってしまうほど、私は、演劇に入り込んでしまいました。

年4回の「つどい」の中で、今回の「つどい」は、スタッフは、一番準備が大変ですし、参加者は、一番参加を考えてしまう「つどい」だと思います。演じた方々は、「やってしまった」気分を大切にしたいなと思います。演じなくなかった方々は、「見ていた」気分を大切にしたいなと思います。皆さま、お疲れさまでした。

<映画について>

○ラストシーン、英国王がうまく言えないとしたら、どのような終わり方になったのだろうと考え込んだ、記憶があります。

○英国王は死ぬまで、言語聴覚士(ライオネル)がついてくれて、スピーチのたびに、アドバイスをしてもらったことでしょう。

普通の吃音のある人にとっては、あり得ないことで、ある意味、英国王は「恵まれて」います。「つどい」のスタッフと参加者にとっての、言語聴覚士は、スタッフと参加者と自分自身ということでしょうか。とても「恵まれて」いますよ。きっと。

後記

このお芝居、どもる我々にとって、素敵な言葉・場面が多々ありました。

・「素敵な吃音…幸せになれそう… You stammer beautifully.」 いやいや英国王になり、こ

の先予定されている数多のスピーチに対して予期不安に押しつぶされそうになっていた時、妻のエリザベスにかけてもらった言葉。「えっ？吃音だから(こそ)結婚してくれたのか？」という明け透けた感じの質問をパーティ(国王)は、ついしてしまったり衝撃的でした。

年齢重ねるほど、この言葉のうれしさ、身に浸みます。どもることに対しての自己否定を絶え間なく続け(知らず知らずのうち含めて)、もうボロボロになった身には。思ったことをべらべらしゃべることができることが良いという価値観だけではありません。この広い世の中は。

・「なぜ国王をピンクに塗らずにめっきでカバーしようとするのでしょうか？」もいいですね。吃音の問題をズバツと言いつつ切っています。どもる我が子のどもりをかわいそうだから隠そう…と思いがちなお母さん達に、じっと考えて欲しいことばでした。前回のサマーキャンプレポートに書いた「ミトンの手袋のエピソード」と本質は全く同じです。どもっている我が子のしんどさ、それは分かります。が、どうせはがれてしまうめっきをかぶせ続けること(ゆっくりしゃべっても、どもる時もあるし、そのしゃべり方が生理的に受け付けられないことも少なくない)は、かえって問題を深くしてしまう。自分はどもる一人の人間なんだ！と一人そっと覚悟を決める(ちょっと大げさな表現ではありますが、ピンクに塗る…)のが良い。

オーストラリア移民であり、かつ何の公的資格も無い(しかし実務経験は豊富)スピーチセラピスト、ライオネル・ローグですが、吃音問題の本質をズバリ突いてくれています。

・「どもりのことばなんて聞かされるいわれはない。時間の無駄！」と、ライオネルはなんと国王パーティに気持ち良く言い切る。初めに宣言した対等の立場の元に。どもる我々には一番きつい言葉ではあります。が、戴冠式だけではなく、これからのパーティ自身の全人生の成否までライオネルのせいだ…と愚痴り続けるパーティはどうなんでしょう。まるででたらめ。論理療法のイラショナルビリーフそのものであり、たとえ国王であっても、間違っ

いる。セラピストとして首をかけても、言わなければならない。捨て身の言葉です。

・「(いや、自分にはどまることも乗り越えて、王として)言うべき言葉がある。(だから、そこ王座に座るのは、自分だ)」

パーティーとライオネルは、さんざん言い合い別れる(決裂しそうになる…)場面が多々ある中での、一番のクライマックスです。この言葉を国王に言わせるために、ライオネルはからだを張ってきたのです。私(国王)は、どまることを超えても、人として王として伝えたい言葉を持っているのだという自覚。そして一つ一つどまりながら、これからも乗り越えて進んでいくしかないんだという覚悟でもあります。この言葉を国王が心から言うところで、ライオネルの仕事は一段落つくのです。

.....
・参加者の皆さん方、ほんとのびのびと演じてくださいました。「お、おお、お王の謝罪を待つ者はなかなか長く待たねばならない」 ああ、これでいい。これでいいのです。何も今ここで手を加える必要などない。ゆっくりしゃべる必要などもない。王パーティーを演じる喜びが波々と伝わってきました。



・映画の方、レンタルでもう一度ご覧になられることお勧めします。まだの方は是非、ご家族でご覧ください。(つどい代表 佐藤隆治)